

地図にあらわれた小笠原

神原文庫のコレクションより

経済学部教授

稲田道彦

1 はじめに

小笠原諸島は日本の南にある、亜熱帯の樹木の茂る島嶼群である。日本のはずれにあることがその島々の特異な歴史を形づくってきた。まずそれは、小笠原に最初に住み着いた人が欧米系の人々とポリネシア系の人々だったことである。その子孫は現在も日本国籍のもとに暮らしている。島嶼群が江戸時代末に日本の領土に組み入れられた後に、日本人が大挙して島に移り住んだ。そして時代の節目の江戸時代末と第2次世界大戦にほとんど全員が島を立ち去っていった。第二次世界大戦後はアメリカ軍の統治下におかれ、本土に疎開していた欧米系住民のみが帰島を許された。その後昭和43(1968)年に日本に返還され、徐々に日系住民が島に渡っていった。小笠原は近代日本の歴史の中でも数奇な運命をたどった島である。日本人は江戸時代にその島々の存在を知り、探検をし、各国から来た人の思惑が関わる中で、紆余曲折を経て日本の領土になった。本稿では、幕末から明治初期にかけての文献のコレクションでは有数である神原コレクションの中で、小笠原に関わる事項を抜き出して、コレクションのすばらしさに触れてみたいと考えている。

2 小笠原への入植

小笠原が日本の版図に加えられていく歴史過程について述べる。この章は主に鈴木高広氏の研究(1984)と倉田洋二氏の書籍(1983)を参考にしている。

これらの島を最初に見つけたのは1543年のスペイン人である。そのことを日本に知らせたのはオランダの人たちである。自分たちがこの島を開発し維持していくことはできないが、日本にこの島に住人を送ることを望んだのである。この島の位置がその要望を産んだ。航海の途中での飲料水や食料の補給基地となることを望んだ。1670(寛文

10)年に漂流し帰還した徳島県海部郡浅川浦の船員の報告をうけて、島谷市左右衛門がこの島に幕府の命令により、渡航した。1697(延宝3)年のことである。

彼の航海は船を建造する努力から始まった。安土桃山時代には、日本の船はジャワやシャムまで渡航し、交易していた。日本の外洋の航海術や造船技術は発展しつつあった。しかし江戸幕府は諸侯が海から江戸を襲うと幕府が簡単に転覆する可能性を考えた。江戸幕府は日本の海運の発展を無理やり押さえ込んだ。1635(寛永12)年に大名の持つ五百石以上の船の破壊を命じた。もちろん建造も禁じた。であるから嶋谷に南の島の探検を命じた時には彼の回りに外洋に乗りだす大型船の建造技術は衰退していた。嶋谷は京都の寺院に奉納されていた絵馬の大型船の絵や渡航してきた中国船から、大型船の構造を頭に描き、造船した。この船は容易に小笠原の往復を果たした。彼は小笠原の父島と母島に上陸し、地図を描き、幕府に持ち帰った。その後幕府は何度も小笠原への航行を試みるが、失敗した。嶋谷の探検はヨーロッパに伝えられ、ドイツ人ケンペルの「日本誌」(1692)に掲載された。そこで小笠原はBoninと名付けられていた。当時の呼称無人(ブニンと発音した)島にちなむものである。このボニン・アイランドは小笠原のヨーロッパからの呼称になった。後にオランダの技術で建造された咸臨丸が就航して、再び渡島が可能になった。嶋谷の探検により、確実にこの島が存在することを日本人が知るところとなった。その存在を人々に知らせたのは、林子平の「三国通覧図説」の出版であった(天明5年・1785年)。天明の大飢饉や浅間の噴火による災害で、人々が食べるものに事欠き、餓死者がでる状況であった。無人島など日本以外の地に開拓地を求めて、人々を鼓舞する社会的な一つの運動と連動した。林子平によって、日本人が雄飛すべき開拓地

と考えたのは蝦夷地，朝鮮半島，琉球，そして南の無人島であった。さて日本人が無入島探検を画策しても遭難によって，渡航できないでいた時期にイギリス船が父島，母島両島の測量をし，海図を作成した。父島をピール，母島をベイリーと名付け，領有を宣言した。そのころハワイ総領事はマウイ島にやってきて，開拓への助言を求めた白人に，小笠原を薦めた。実際に30名弱のカナカ人（ポリネシア人）と共に5人の白人が植民した。1830（天保元）年のことである。5人はジェノア人マテオ・マザロ，アメリカ人ナサニエル・セボリー，イギリス人ジョン・ミリチャンプ，チャールズ・ジョンソン（デンマーク人），アメリカ人アルデン・カピンであった。彼らはこの島で，農業を行い食糧やラム酒の生産をした。これらは付近で操業していたアメリカの捕鯨船に売られた。当時植民地アメリカのイギリスへの有力な輸出品の一つに鯨の脂で造った蠟燭があった。石油が発見され，鯨油に取って代わるまで大量に使われる油が鯨から採取されていた。捕鯨船にとっても都合の良い，食糧等の補給場所であった。中でもアメリカ人ナサニエル・セボリーは大いに財をためることができるほど，富裕になっていった。

咸臨丸に乗った日本人が来島したのはこの時期1861（文久元）年であった。彼らにはこの島が，日本の領土であるから，これから日本国民になるかどうかを突きつけられたのである。簡単には承諾できる申し出ではない。最終的に彼らはこれを受け入れた。来島する船員による治安の悪化がすみ，島民が生活に不安を覚えていたこともその理由の一つであった。以後日本人として生きる道を選んだ。その後江戸幕府は多数の日本人をこの島に送り込んだ。主に当時飢饉が頻発していた八丈島の島民を中心としていた。幕府が瓦解するときこの来島してきた日本人は全員本国へ引き揚げた。明治政府は改めて，諸外国にこの島の占有を宣言するところからはじめた。外国の反論がなかったことよりまた再び，日本人を開拓農民としてこの島に送り込んだ。彼らはかなり急な斜面まで耕してサトウキビを栽培した。砂糖は日本人には贅沢品であり，その販売価格は他の作物に比べて高かった。日本の学校が開かれ，日常生活が日本語で，日本風の生活を送るようになった。

3 神原文庫の中の小笠原

神原甚造氏は日本人が外国へ目を開いていく時期の図書をたくさんコレクションされた。江戸時代に外国の事情を知るために多くの出版物が上梓された。外国知識，それを表した世界地図，日本人漂流者の手記などである。神原文庫には林子平三国通覧図説がコレクションされている。なお文献末尾の数字はその図書の分類番号である。

まず無人嶋の存在を世に知らしめるきっかけとなった三国通覧図説から述べる。

「三国通覧図説 図五枝附 全」天明5年乙巳秋，仙台林子平図並説，東都書林須原屋市兵衛梓。

292.01



林子平は日本周辺の朝鮮八道，琉球三省三十六

嶋、蝦夷の次に無人嶋を述べている。その記述は、「此島本名小笠原嶋ト云ドモ、世挙テ無人嶋ト称スル故。称ニ随テ無人嶋ト表スル也。小笠原嶋ト名付ツケシ事八昔時小笠原某此島ヲ見出シテ地図ヲ持チ帰シ故、故名付シ也。二百年前、イタリア人メガラニユスト云者南方ニ新世界見付タルヲ直ニメガラニカト名ツケタルガ如シ」という文章で始まる。現代の我々が使うようにイタリア人という言葉を使う林の思考様式を当時の江戸時代の中で考えて欲しい。林子平の無人嶋に関する情報は延宝3年に実地に小笠原諸島に出かけた嶋谷市左右衛門の家族に取材して得ているようである。彼の情報源である嶋谷一行は、延宝3年長崎唐船仕立ての船を建立し、大工八兵衛ら三十余人で下田を延宝三年閏四月五日に出航し、小笠原へ行き六月二十日に下田に帰還した。「長崎ノ住人嶋谷市左衛門、中尾庄左衛門、嶋谷太郎左衛門ノ3人ガ學術者デ天文地理ヲ知ル者ナリ」と述べる。林子平の文では、無人嶋は八丈より北の無人嶋（父島）まで八百八十里、さらに南の無人嶋（母島）まで二百里の位置にある。嶋々は大小八十九山あるが、七十余りは岩石嶮峻の小嶋であり、人居住に向かないと書いている。椰子、ピンロウ樹などの亜熱帯植物や菊面石などの産物をあげている。「此ノ嶋二人ヲ蒔キテ」村落を建立し山海の業を起すべしと唱えている。

また林子平は長崎のオランダ人アアレントウェルレヘイトに会って、日本の辰巳二百余里にウースト（荒れ地の意）エーランド（嶋の意）が彼の持つ地理書ゼオガラヒーから説かれたと記述している。

「三国通覽輿地路程全図 五枚之内」天明五年秋、仙台林子平図、東都須原屋市兵衛梓。 291.038

三国通覽図説に掲げた全地域を示した全体地図である。その一部に小笠原が掲載されている。「無人嶋本名小笠原嶋ト云八十餘嶋アリ、北ノ島、南ノ島ト記載サレ、北ノ嶋ハメグリ十五リ奇木多、南ノ嶋八廻リ十里大木多」と記され、周辺の島には「メグリ七里ト、五里、三里、二里」の周囲と大きな島からの距離が記載されている。ただ八丈より二百余里と書き込み、本文中の八丈からの距離八百八十里とかなり距離の差がある。

「無人嶋大小八十餘山之図」天明五年秋、仙台林子平図、東都須原屋市兵衛梓。 454.9



色刷り折畳みの本である。小笠原諸島の拡大地図で、現在の地形図に比べても島の形は多少ゆがんでいるが地形の特徴を捉えている。北ノ嶋が北緯二十七度半、南ノ島が二十七度と天度の高下（緯度）を示している。北ノ島には大村、奥村と名付けられた場所があり現在と若干位置が違うが、それらは今人が住まう居住地になっている。嶋谷が勧請した大神宮の位置も書き込まれている。母島には片湊の地名が見えるが今の集落の位置とは全く違っている。嶋谷一行は航行の際、さほど航行に苦労しなかったけれど、後の航海で大きな障害となった八丈島と御蔵島の間を流れる黒潮クロセ川について、乗り切り難しと説明を入れている。

さて、当時巷に流布していた地図類に於いて、小笠原諸島は地図にどう描かれているであろうか。

神原コレクションには日本を含む世界地図が多く所蔵されているが、それらの違いはどの時代のヨーロッパ製の世界地図を原図とするかという点で、相違している。コレクションには、当時多くのバリエーションが出回った長久保赤水の世界地図を集めている。これは中国に滞在していた宣教師のマテオ・リッチが作成した世界地図を翻案した地図である。さらにそれ以降にメルカトル図法や正積図法の影響下に日本近海の地図を描いた地図とがある。まず長久保赤水が監修した地図は6枚あるが、その出版年は書き込まれていない。

「地球萬国山海輿地全真図説」常州水戸 赤水長玄珠述（長久保赤水）、江戸末。 290.38 3

色刷り、折り畳みの小本である。小笠原はさんごじゅじまの西にごとうじまと記載されている。

その南の赤道付近に白人嶋との記述がある。地図上部の余白に書き込みがある。嘉永七年閏七月十七日亥の刻に日食があったとし、同時に嘉永七年は安政元年なりとも書いている。安政年間の早い時期にはこの地図が出版されていたことを想像させる。

「地球萬国山海輿地全図説」 水戸 赤水 長玄 珠述 . 290.38 4

色刷りの、折りたたみの一枚の地図である。図中に小笠原に当たる位置の嶋には強盗と記される。その東には珊瑚樹島、東南の赤道近くに白人嶋の地名が見える。八丈島は八十一と書かれている。

「地球萬国山海輿地全図説」水戸長赤水先生原稿、江戸山崎美成補著、嘉永3年庚戌季春、高谷氏蔵板 . 290.38 22



色刷りの折り畳みの小版の一枚地図である。無人嶋が小笠原である。東に珊瑚樹島、その北には、八丈、桂島、金島、銀島、野、三十七島の島名が見える。無人嶋の南の赤道付近には白人嶋がある。西は琉球があり、その周囲に大島、小琉球、大寛(現台湾)、呂宋マ子ラ、ルマカハの地名が記されている。この地図では九州が省略されている。

「地球萬国山海輿地全図説」水戸長赤水先生原稿 江戸山崎美成補著、嘉永三年庚戌季春、高谷氏蔵板 . 290.38 23



色刷り、折り畳みの小版の一枚地図である。前記地図と同様であるが、小笠原は強盗と記述されている。東に珊瑚樹島、南に白人島、北に八丈、桂島、金島、銀島の地名が見える。台湾が大究と記載される。

「萬国地図」 . 290.38 5

大型の手書きの彩色筆写地図である。地図の製作に関する情報は書かれていない。明治時代の写本の可能性がある。ただし大判である。長久保赤水タイプの地図を模写している。小笠原にあたる島に「ラダラン」と記している。南に珊瑚樹嶋北に八丈その東に金嶋とある。日本に於いては九州、四国が記入されている。小笠原の南にあった白人島がなくなっている。

「地球輿地全図」安倍泰行脚撰，嘉永六癸丑年孟冬，官許 東都鈴亭主人森桑補訂蔵版．

290.38 9



色刷りの，折り畳み小型の一枚地図である。長久保赤水の系譜の地図である。小笠原は強盗と記される。付近では，東に珊瑚樹島，北に八丈，桂島，金島，野島，三十七島，南に白人島が記載されている。四国，九州は書き込まれている。台湾は大憲である。

以上が長久保赤水タイプの地図である。彼が模刻した地図は中国に滞在した宣教師マテオ・リッチが作成した世界地図に基づくものである。パリエーションは豊富で同一のものは一枚もない。それぞれに版木を作成したのであろう。推測であるが，中国に滞在したヨーロッパ人からみて，日本近辺はあやふやな地理知識であったろう。九州や四国と奄美大島琉球が混同されるなど大いにあり得たことであろう。ただ日本に住んでいるものからすると，その混同は許されないものとなる。これらの地図では九州がなかったりする地図もある。また小笠原の地名が2種類存在する。無人嶋と強盗島である。地図中で同じ形に配列される島々であるから，当時日本で一般的であった無人嶋に対して強盗島の名がどうして付けられたのか，歴史

的にどちらが古い呼称なのか将来の研究の課題となる。

以下はマテオ・リッチ長久保赤水のモデルを離れたタイプの，小笠原諸島が書き込まれた日本・世界地図である。

「萬国輿地方図」蜷河蔵版，玄〃堂 松田緑山製之，明治四年辛未初夏発行． 290.38 8

色刷り，折り畳み小型の一枚地図である。銅版印刷か。小さい図面に小さい字で地名がたくさん書かれている。メルカトル図法に従う，正確な地球の形を目指そうとした地図である。よく見ると北海道はかなり歪んでいるが。正確な形を表そうとした著者の苦心が忍ばれる。当時のヨーロッパの地図の翻刻であろう。八丈の南に無人諸島とある。島の字は三角の山形の絵文字となっている。東の群島にはカランピウスと記述されている。長久保本の珊瑚樹島の位置に当たる。

「萬国輿地全図」東京玄々堂門人 石田斉図並びに刻，明治5壬申9月御免許，神武天皇皇紀二千五百三十三年刻成 明治六刊，題纂「掌中萬國輿地全図」． 290.38 7



色刷りの折り畳み，一枚の小地図である。小笠原は「無人シマ 八十余リアリ」と記されている。周辺では南に硫黄シマ，パラセヘラ島，東にカランピウス島，正確なメルカトル図法に従っている。北海道も正確になっている。長久保の地図に比べるとオーストラリアが島になっている。かなり世

界の知識が正確になっている。

「銅版 地球萬国全図」銅版図。(巻頭地図)

290.38 17

北海道の形の正しさからすると明治の初・中期の作成と思われる。小笠原は無人シマとして記載されている。全体的に小版で世界を二つの円で表現している。ヨーロッパと北アメリカがこの地図では地図の端になり描かれない場所となっている。地球を観る視点が日本の上にある。日本を中心に世界を表す技術を用いて描いている。正積図法による地図製作技法を学んだ、日本の地図作家が作成したと推測する。

下の地図は世界地図ではなく、日本全図で、しかも小笠原諸島が描かれていない地図である。

「日本輿地路程全図」弘化三丙午年三月刻成、東都書肆 須原屋茂兵衛・岡田屋嘉七・泉屋市兵衛・山城屋佐兵衛・丸屋善兵衛・丁子屋平兵衛 合梓、弘化三年栗原信充刊、安永乙未阿波国儒者讃岐紫邦彦序。

291.038

小笠原は地図内にみることはできない。八丈島の所に自是南有無人島曰小笠原 タテ六七十リ、シマ大小五六十と書かれている。出版年は弘化三年(1846)で東都、須原屋茂兵衛、丁字屋平兵衛ら6名による出版である。

さて小笠原諸島に関してはもう一冊大切な本がある。

「小笠原島誌纂」明治21年7月刊行、小笠原島庁蔵版。

291.369

小笠原島司の小野田元熙が当時の文献を網羅して歴史的事実を書き記した。それにその時の小笠原現勢を示そうと意図した書籍である。このような時期に歴史的事実を記そうとした試みは後に小笠原を知りたいと思う者の重要な出発点となる書籍である。

序の中で小笠原と内地の物品のやりとりを述べている。内地から小笠原への輸入に払った金額が12,611円90銭で内地へ販出したのが19,665円25銭で、差額の7,053円35銭は島民の貯蓄に回ったと誇らしげに記している。それほど小笠原の農業・漁業は盛んであった。この本には外国人の来島の歴史的事実や彼らの生活が述べられている。先の2章で参照した研究はこの本の記述を大いに参考に



していると思える。例えば1853年に在島の外国人は13条からなるピール島移住民定約書を定め、植民政府の体裁を整えていた。そこに江戸幕府が乗り込み、日本の領土に組み込むのであるから、その努力たるや並大抵ではなかった。

残念ながら、コレクションに小笠原への漂流記は含まれていないが、江戸時代に商船や漁船が嵐にあつて外国へ流され、何らかの方法で日本に帰還し、幕府等に提出した漂流記が数冊含まれている。インドネシア近海や鳥島さらにロシアへ流された船員の漂流譚は当時の人々に日本以外の国の

存在を強烈に意識させたに違いない。江戸時代末期の外国へのほのかな知識を、寄せ集めた神原コレクションの意味は大きい。ここにその書名のみ記して興味ある人の注意を引いておきたい。

「漂流珍話 2冊」299. 手書き本である。嘉永2年に南の海に漂流した。イギリス船の絵がでてる。「漂客談奇 2冊」299. 手書き本である。土佐の漂流者で、3人の中に幡多郡中乃の万治郎の名前や、土佐吾川郡宇佐浦の伝蔵と五右衛門の名前が見える。「志州船頭漂流譚」宝暦7年丑年299。手書き本である。「土州船・大坂船・薩州船漂流譚」寛政九年巳年八月 291.136。無人島(八丈島より南百里余り)へ漂流した人のうち、十四人が生還し、八丈島の代官に差しだした口上書の写しである。鳥島への漂着であろうか。「南海紀文 5冊」299. マラッカスマトラへの漂着の聞き書き本である。「環海異聞 15冊」299. 手書き。ロシアへの漂流譚。次の本も含めて手書きの写本である。「環海異聞 10冊」299。

4 終わりに

小笠原の開拓に関する直接的な資料は神原コレクションには残念ながら含まれていない。しかし神原コレクションは包括的な幕末から明治にかけての日本人の活動を示す書籍群が含まれている。その中でも地図類の収集と、人々の意識を変えたと思われる基本的な書籍がコレクションされている。さらに丹念な調査を行えば、当時の日本人の外国への知識の拡大という問題が明らかになると考える。

この小論の作成に関して以下の方々のご協力を得ました。感謝いたします。助言及び写真撮影をしていただきました柴田昭二先生に感謝いたします。さらにこれだけ膨大で貴重な資料を日常的に保管し、また今回の閲覧の煩瑣な労をお願いいたしました櫛橋一雅係長にも感謝いたします。

参考文献

鈴木高弘(1984)「小笠原諸島からみた幕末・明治期の日本」昭和59年度東京都教員研究生報告書，倉田洋二編(1983)「寫真帳 小笠原 発見から戦前まで」アブック社出版局，372p.

